

テーマ展「老いを言祝ぐー能の世界からー」展示作品リスト

番号	名称	作者	数量	時代	所蔵
<b>日本における老人のイメージー長寿と聖性ー</b>					
1	教訓抄	伯近真著	1冊	天福元年(1233)成立、 江戸時代後期写	彦根城博物館 (井伊家伝来典籍)
2	鳩杖		1本	江戸時代中期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
3	寿老人図	狩野永岳筆	1幅	江戸時代後期	彦根城博物館
参考	石山寺縁起 巻1 (パネル)		1巻	江戸時代	国立国会図書館
4	今昔物語 巻1		1冊	江戸時代	彦根城博物館 (井伊家伝来典籍)
<b>能「翁」ー世を言祝ぐ二人の翁ー</b>					
5	翁・千歳・三番叟図		3幅	江戸時代後期～明治時代	個人
6	能面 白色尉		1面	室町時代	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
7	翁狩衣 萌葱地蜀江文様		1領	江戸時代後期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
8	指貫 紫地八藤丸文様		1腰	江戸時代後期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
9	翁烏帽子		1頭	昭和5年(1930)	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
10	翁扇 蓬萊図		1握	江戸時代後期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
11	能面 黒色尉		1面	江戸時代前期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
12	直垂 黒地松雪符笹文様に鶴亀紋		1揃	江戸時代後期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
13	金梨地牡丹唐草能道具文時絵鞍・鏡		1揃	江戸時代	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
<b>能「高砂」ー長寿と夫婦合の象徴ー</b>					
14	高砂図	張月戴筆	1幅	江戸時代後期	個人
15	能面 小尉	児玉満昌作	1面	江戸時代中期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
16	能面 姥	甫閑満猶作	1面	江戸時代 享保7年(1722)	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
17	厚板 小格子		1領	大正～昭和時代初期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
18	水衣 金茶地無文		1領	江戸時代後期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
19	大口 白地無文		1頭	江戸時代後期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
20	尉扇 霞に唐人物図		1握	江戸時代後期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
21	老女扇 柳橋白鷺図		1握	江戸時代後期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
<b>能「白髭」ー威厳に満ちた老体の神ー</b>					
22	能面 鼻瘤悪尉		1面	桃山時代	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
23	能面 茗荷悪尉		1面	江戸時代中期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
24	袷狩衣 白地松皮菱繫ぎに亀甲繫ぎと笹文様		1領	江戸時代後期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
25	鳥兜		1頭	昭和時代初期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
26	神扇 桐鳳凰図		1握	大正～昭和時代初期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
27	神扇 浜松白鶴図		1握	大正～昭和時代初期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
<b>能「枕慈童」ー不老長寿のめでたさー</b>					
28	能面 童子	洞白満喬作	1面	江戸時代中期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
29	唐織 紅萌葱茶段流水に菊文様		1領	江戸時代後期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)
30	葉団扇		1握	大正～昭和時代初期	彦根城博物館 (井伊家伝来資料)

## 写真解説

### 1 鳩杖 <sup>はとづえ</sup> 1本 (作品リストNO. 2)

全長 117.1cm

江戸時代中期

当館蔵 (井伊家伝来資料)

頭部に小ぶりの鳩が一刀彫で表された木製の杖。井伊家8代当主である直定<sup>なおさだ</sup> (1702~1760) が50歳の節目を迎えた、寛延4年 (1751) 2月13日に催された祝宴<sup>めのと</sup>において、直定の乳母<sup>めのと</sup>だった90歳の女性から献上されたものです。鳩杖は、鳩は餌を食べる時にむせることがないとされることから、長寿を迎えた者が鳩にあやかれるようにとの願いを込めて贈られたというもので、すでに平安時代から、老臣をねぎらい、いたわるために宮中から下賜された記録があります。

この杖の添状には、献上の際に乳母がこの杖を突き、さらにその場に同席していた98歳の老翁にも杖を突かせ、その後、彼らの長寿にあやかることができるようにと、直定自らも杖を突いたと記されています。この杖は、高齢者が長寿を体現しためでたい存在とされていたことを示すと共に、長寿を祝い、高齢者をいたわるという、老いに関わる営みについて知ることのできる作例です。



鳩杖の頭部



### 2 能面 <sup>のうめん</sup> 白色尉 <sup>はくしきじょう</sup> 1面 (作品リストNO. 6)

面長 21.1cm 面幅 16.9cm 面奥 9.3cm

室町時代

当館蔵 (井伊家伝来資料)

白色尉は、主に正月をはじめとする祝賀の際に演じられる演目「翁」<sup>おきな</sup>において、主役である老体の神の翁<sup>おもて</sup>が用いる面です。「翁」は、能が成立する以前の古い芸能を受け継いだ、能の根本に位置づけられる特別な演目です。翁と、同じく老体の神である三番叟<sup>さんぼうそう</sup>が、それぞれ舞を舞い、天下泰平・国土安穩・五穀豊穰を祈念し、世を祝福します。

白色尉という面は、古くより、面そのものが神聖な神の面であると考えられてきました。その造形も他の面とは異なり、顎<sup>あご</sup>は下部を切り離して飾り紐で結ぶ切顎<sup>きりあご</sup>とし、長い顎髭<sup>あごひげ</sup>と白い飾り眉を備え、眼はへの字型にくり抜きます。大いなる祝福を受ける神にふさわしい、晴れやかな笑みに満ちた表情が特徴です。長寿を象徴するめでたい存在、神に近い聖なる存在という老人のイメージが端的に表れているといえるでしょう。



3 <sup>おきなおうぎ</sup> 翁扇 <sup>ほうらいず</sup> 蓬莱図 1 握 (作品リストNO.10)

幅 35.5cm 高さ 20.5cm

江戸時代後期

当館蔵 (井伊家伝来資料)

<sup>おきなおうぎ</sup> 翁扇 は、「翁」の主演である翁が使用する <sup>ちゆうけい</sup> 中啓。中啓は扇の一種で、閉じた扇の先が半ばから開いた形になるように作られたものを指します。

中啓は、能において最も基本的な小道具の一つです。使用する役柄あるいは流派によって図柄が決まっており、翁扇は、金地に彩色で蓬莱山を描くのが一般的です。蓬莱山は、遙か東方の海上にある、神仙が住み、不老不死の妙薬があるとされる、中国の神仙思想で説かれた仙境の一つ。日本においても、不老不死の理想郷、さらには吉祥を象徴する存在として親しまれ、その意匠は様々な美術工芸品に表わされてきました。翁扇には、蓬莱を象徴する典型的な <sup>いしやう</sup> 意匠 である、長寿を象徴する鶴と亀、亀の背に乗る松竹梅が生えた岩島、波が表されます。この世に祝福をもたらす神である翁にふさわしい、華やかで吉祥性に満ちた意匠の道具といえるでしょう。



4 <sup>たかさごず</sup> 高砂図 <sup>ちやうげったい</sup> 張月戴筆 1 幅 (作品リストNO.14)

縦 43.9cm 横 50.7cm

江戸時代後期

個人蔵

能「高砂」を主題とした絵画。「高砂」は、住吉（大阪府南部）と高砂（兵庫県南部）という離れた土地に生える2本の松が、同じ根を持つ雌雄の松であるという <sup>あいまい</sup> 相生の松の伝承に基づいた演目です。住吉の松の精霊である <sup>じやう</sup> 尉 と高砂の松の精霊である <sup>うば</sup> 姥の老夫婦が、住吉を訪れた <sup>かんぬし</sup> 神主一行の前に、それぞれ熊手と杉箒を持って現われ、長寿の象徴である松のめでたさ、夫婦の円満長寿を説きます。その内容から、長寿と夫婦和合を象徴する演目として大いに親しまれ、能の台本にあたる <sup>うたい</sup> 謡 の一節が婚礼の席でも謡われたほか、絵画をはじめ、様々な美術工芸品の主題ともなってきました。



本作は、青い葉を茂らせた松の傍らに立つ、「高砂」の尉と姥を描いており、それぞれ熊手と杉箒を持つ典型的な姿で表されています。2人の前に描かれた亀と画面中程に描かれた鶴は、長寿を象徴するモチーフとして、「高砂」を主題とした作例にしばしば見られるものです。鶴の隣に旭日を加えることで、より一層めでたい雰囲気が高められています。

作者の <sup>ちやうげったい</sup> 張月戴 (1814 [1813] ~75) は名古屋で活動した絵師で、彦根出身の絵師である <sup>げっしょう</sup> 月樵 の長子。

5 能面 鼻瘤悪尉 1面 (作品リストNO.22)

面長 20.9cm 面幅 17.8cm 面奥 11.4cm

桃山時代

当館蔵 (井伊家伝来資料)

「<sup>しらひげ</sup>白髭」や「<sup>おおやしろう</sup>大社」などの演目において、<sup>おもて</sup>老体の神の役で用いる面。  
<sup>あくじょう</sup>悪尉の「<sup>あくじょう</sup>悪」は、<sup>あか</sup>荒々しく<sup>あつ</sup>猛々しいことを意味し、<sup>かなわ</sup>金輪<sup>は</sup>を嵌めた眼や  
歯は、超人的な力を持つ人ならざる存在であることを表しています。  
<sup>はなこぶあくじょう</sup>鼻瘤悪尉の名は、鼻の付け根に瘤状の隆起があることに由来するもの。  
眉間に皺を寄せて前方を睨みつける恐ろしい表情は、<sup>はくしきじょう</sup>老体の神にふさわしい  
威厳を感じさせます。柔和な笑みを浮かべた<sup>はくしきじょう</sup>白色尉とは対照的な、  
年を重ねた、<sup>いふ</sup>畏怖すべき聖なる存在としての老翁のイメージが反映されているといえるでしょう。

